

## 日本気象学会春季講演会

日時 昭和44年3月28日(金) 13時—17時

場所 東京都杉並区高円寺北4—35—8 気象研究所内講堂

1. 研究発表 座長 曲田光夫 13時—15時45分(発表題目・要旨は下記のとおり)

2. 座談会:司会者 大井正一(講演企画委員) 16時—17時 気象学会講演会のあり方について

荒井 康(気研予報):長波の季節変動(第6報)

成層圏の高度を調和分析し,その振巾と位相角の季節変動を解析した.そして今迄数回にわたって報告した北半球と南半球の500ミリパル面における季節変動との比較を行った.

用いた資料は2年間の平均値および10年平均の月平均値(ベルリン天気図,6層)等で,この平均値から求めたものと,個々の年から求めた変動の違い等について述べる.成層圏ではファイナル・ウォーミングに対応する著しい変化が見られるが,これらの特徴について解析した結果を報告する.

松本誠一・常岡好枝(気象研):昭和42年7月豪雨の降雨群に関する解析

42・7豪雨の自記雨量観測資料(10分間雨量の読取値)により,中規模降雨域を詳細に解析した.降雨群には移動性のものと停滞性のものとがあり,とくに顕著なものとして,各地に災害を引続き発生させた移動性雨域と神戸付近に10時間近く停滞したものが解析される.

降雨域面積,雨量,寿命などの間の統計的特性を調べた.また雨量に現われる短週期変動について述べる.

松本誠一(気象研):運動量の対流輸送による重力波の不安定化

さきに数値実験により示した中規模重力波の発達の問題を,線型モデルにつき追試した結果を述べる.不安定領域は対流輸送係数が充分大きくかつ基本流の鉛直シヤが適当な範囲内にあるときに見出される.この不安定波は,鉛直シヤの影響をうけた進行性の重力波と,運動量輸送によって付加される発散場が推進するもう一つの進行性の波とが相互に干渉するときにおこる.

地面まさつの影響は不安定領域を拡大し,この拡大された領域では growth rate が波長の短い波に対してある一定値に tend する.このことは中規模波長領域に preferred scale を見出す可能性を示している.

山本三郎・湯山 生・大井正一(河口湖測・気研):山雲の分類(2)(富士山の雲)

第一報に於て大井は山雲の形態的 분류と気象条件による状態的 분류と二つがある事を示した.山本・湯山が多

年に亘って撮影した富士山の雲とその時の経験や気象条件を対象する事により上記二通りの分類を行った.阿部氏の分類とは異なる点がある形態的 분류は南西気流型として, A1 かいまぎとジャンプ A2 多重笠 A3 笠と翼 A4 かいまぎと渦型吊し, A5 笠と多重吊し, 北西気流型として B1 吹下し型 B2 水平吹出し B3 上向きレンズ B4 離水笠 B5 吊し B6 前線型 其他として C1 東斜面上昇型 C2 南西斜面上昇型とした.状態的 분류としては I 一重笠 II 多重笠 III かいまぎと吊し雲の a 翼型, b 渦動型, c 多重型, d ジャンプ型の組合せで12の型を作った.是等の各々について気象条件の差異を調べた.

岡林俊雄(気象予報部):昭和44年1月の大雪時の APT 写真解析(北陸不連続線の解釈)

昭和44年1月は,上旬と中旬に本州の日本海側に警報がでた大雪が二度あった(主として北陸地方と東北地方).その時の気象衛星の APT 写真の解析を行ったが主な結果は

1. 一般場が北西風のときは,大きくみると雲の筋の流れはそれに平行であるが,日本海中部にはしばしば雲の流れの収束線または不連続線があらわれる.これは 850mb 面の流線のそれとほぼ一致している.
2. 大雪のときは北朝鮮沿岸から北陸または東北地方にのびる長さ 1000km におよぶ長大な収束雲ができ,丁度それがぶつかったところが大雪となった.またこの収束雲の近くにしばしば小低気圧が発生する.
3. この収束雲をもたらす収束線は複数であるが,長大なのは一本か二本である.これは従来北陸大雪のときいわれていた北陸不連続線の全容で,北陸不連続線は観測範囲・データの関係でその収束線の海岸近くのごく一部分を対象にしていたと考えられる.

荒川秀俊(東海大学):福島県郡山市における徳川時代後期の気候

守山藩御用留帳により,享保11年(1726)から慶応4年(1868)に至る143年間の気象変化を調査した.この記録により,毎日の天気を実際に追跡できた.なお,宝歴・天明・天保・慶応年間の異常気象を,併せて調査した.